ラオス向け子ども用車椅子９０台贈呈式

日時　　：　２０１９年２月２２日　　午前９時～午後１時
場所　　：　サイセタ郡　障害児協会庭
主な出席者　：　サイセタ郡スリナ・ブッタラー副郡長、サイセタ郡各地区委員、
小学校長、ソンペット・アッカボン障害者協会会長、子ども代表と
家族代表、小田謙介当会理事と永峰玲子会員、松井久美会員、
小泉京美相模女子大教授と学生

贈呈式

贈呈式は、サイセタ州のホンソウパブ小学校に隣接する障害児協会（ACDA=Aid Children with Disability Association）事務所の庭で行われた。我々を含めて１００名近くが参加した。

屋内での式に比べて集中度に欠けたり、スライドの鮮明度が不足するなどの不便さもあったが、屋内のかしこまった式と違って、開放感があり、出席した人たちが自由に移動して我々訪問者に話しかけたり、あたかも村の人たちの集まりの中での式となり、子ども達の家族なのか関係者なのかよくわからない人たちが車椅子を喜んでくれている言葉や表情に直接触れる温かい印象的な式となった。

スピーチやプレゼンテーションは日本語で行われ、ラオス在住２８年でプロの通訳の村山明雄氏が流ちょうなラオス語で通訳をしてくれたので、子ども達の家族を始め、出席した人たち全てに正確に伝わったと感じた。また、式後にも村山氏の通訳や我々の現地ガイドを介して訪問者と参加者との会話のグループがあちこちで見られた。

障害児協会の活動紹介の写真に当会の２０１７年の寄贈の紹介写真も（右下）

出席した郡と地区の役員や委員の皆さんと前日訪問した地域（村）の元気な長老さん達

１）ラオス側挨拶

〇ソンペット・アッカボン障害児協会会長

２０１７年寄贈の９０台と今回の９０台の寄贈に対しての感謝の意を表す。

車椅子のおかげで子ども達と家族の生活が向上し、特に子ども達が外出できるようになり通学など社会に足を踏み出したことが一番の喜びであった。

今回の車椅子は昨年９月のダム決壊被害のあったラオス南部の子ども達への支援にもしたい。経済的に恵まれない家庭を対象として、健常者と同様に社会参加できるための活用を願っている。ラオスで入手できる車椅子より日本からの整備済み車椅子の方が上質であり今回の寄贈を大変感謝している。

○来賓のセイセタ郡スリナ・ブッタラー副郡長のスピーチ

このような素晴らしい車椅子だとは思わなかったので大変感謝をしている。

経済だけなく障害児への支援を増やしたい。今後もぜひ活動を続けてラオスにも送ってほしい。その折にはぜひ当セイセタ州にもまた配布をお願いしたい。

２）当会小田謙介理事のスピーチ：

車椅子は日本の子ども達から寄贈されたもので、保護者の皆さんは“自分の子どもの車椅子が、ラオスのお子さん達に役立つことが大変うれしい”と喜んで寄付してくれた。多くのボランティアの人たちの協力で車椅子が皆さんの手に渡った。

日本では車椅子は単なる補助器具ではなく、あたかも家族の一員として大切にされている。皆さんも受け取った車椅子を家族が一人増えたと思って大切に、そして有効に活用してほしい。それがこれらの車椅子に関わったすべての人達の願いである。

会員の永峰玲子さんが障害を持つ娘さん「かのん」ちゃんの紹介をスライドで行った。

「“かのん”の症状を知って彼女に健康で産んであげられなくてごめんね、と悲しみと不安の毎日でしたが、母親の自分が悲しんでいるのではなく、“かのん”が少しでも楽しい人生を送ることが出来るようにすることを決心し、出来るだけ外に出かけて多くの人達と接するように心がけています。人々に話しかけられて“かのん”が嬉しそうにニコニコしていると自分も幸せになれます。

車椅子の一台一台には日本のお子さん達や家族の気持ちが入っています。車椅子が皆さんの生活と笑顔と楽しい思い出を作っていく事を心から願っております。」

相模女子大学学生のプレゼンテーション「日本での車椅子活動紹介」

パワーポイントスライドを使って、今回配布された車椅子が日本の子ども達から寄付されて、ベトナムやエチオピアの人達や高校生、大学生を含む多くのボランティアの人たちの手で、子どもの安全を最優先に心がけた整備修理をして送り出すまでの過程を紹介した。

整備の基本「ムシゴム交換」のデモンストレーション

当初の予定では、学生たちが動画を使ってムシゴム交換とタイヤ交換の説明を行う予定だったが、屋外での式でスライドの鮮明度が充分でないので、学生たち数人に分かれて、前日の自宅訪問で交換した古いムシゴムと日本から持参した新しいムシゴムを示しながら車椅子を使ってムシゴム交換のデモンストレーション行った。

その際、「ラオスではムシゴムが手に入らないが」との質問があり、日本から持参したムシゴムを見せて、「ACDA に渡したから受け取る様に」と回答。それなら安心だ、と笑顔で言ってくれた。意図せずしてタイミングのよい有難い質問だった。

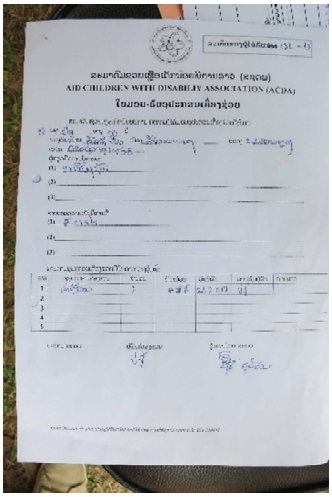
なお、整備活動日に撮影したタイヤ交換や、ムシゴム交換などの基本的な修理方法の動画は参考資料として動画として ACDA に手渡した。

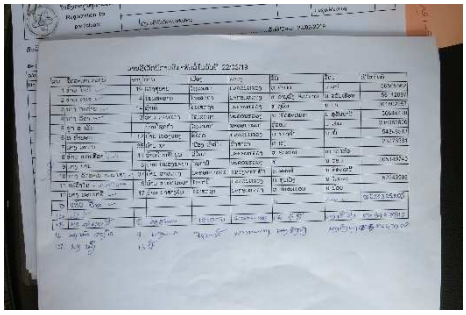
３）障害児協会からの感謝状と学生グループからの桜の花に書いた
　メッセージの贈呈

４）子ども達代表と家族と訪問グループとの写真（地元プレスの取材）

５）式場に用意された車椅子

６）ACDA の職員が一台ずつ確認をして車椅子を配布し、父兄の受けとり
書類を確認し配布データを作成。

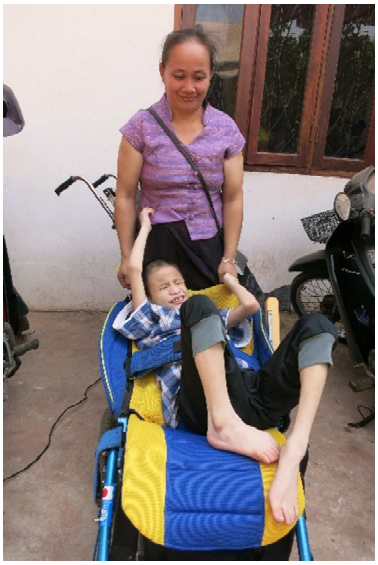




７）ラオス語と日本語の通訳をしてくれたラオス在住２８年の
通訳のプロ村山明雄氏。

当会の理事の知人であり、村山氏の通訳無くしては訪問の成功はあり得なかった。
通訳以外に、同氏の話を通じてラオスの事をより理解することが出来、「ラオスを好きになってください」の言葉は印象に残った。

式に出席した子ども達と家族



学生グループから子ども達への文房具と菓子を障害児協会に

式後に全員で楽しい食事

前回プロジェクト（２０１７年）で車椅子を受け取った子どもの自宅を訪問

２月２２日の贈呈式に先立って、２０日と２１日午後、前回２０１７年に車椅子を受け取った１３名の子ども達の自宅を訪問した。

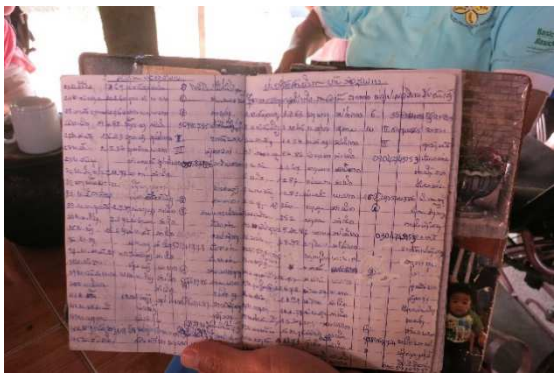
同じ車椅子を本人だけでなく祖父、父親も時々使用しており、修理も的確に行って大変便利に活用している家もあれば、故障したので長く使っていない、また、子どもが大きくなって座面が窮屈になった車椅子など、様々な現状を知ることが出来た。

一番多かったのが、タイヤの空気が抜けている車椅子であったが、タイヤには異常無さそうなので、ムシゴムを調べると予想通り黒いムシゴムが黄色く劣化しており機能していないので空気が入らない。日本から持参したムシゴムと交換して、自転車屋などで空気を入れることを伝えた。

もし、空気が入らずに自転車屋でも修理が難しい場合には障害児協会（ACDA）と連絡してその車椅子を修理するか、一旦返却して、新たに配布を受けるか、の相談をすることを伝え訪問に同行した ACDA の職員と２日目に同行したソンペット会長にもその手配を取ることを確認した。

サイズや車椅子の構造が合わずに使用していない車椅子に関しても、調整が出来ない場合は一旦 ACDA に返却して交換についての話し合いをすることを伝え、その手配を確認した。

写真は、自分の地域内での車いす使用者の情報を管理している一つの地域の７２歳の地域長（村長）と几帳面に書かれた手書きの記録ノート。地域長の後方に写るのは、気さくな女性で２２日の贈呈式にも出席。



今回は、図らずも日本での活動日と同様に相模女子大のメンバーがすべての車椅子のムシゴムを点検し、家族や ACDA の職員に説明をしながら、新しいものと交換する作業を行った。また、先々の交換のために日本から持参した予備のムシゴムを渡した。

写真は空気が抜けて一月前から使用していなかった車椅子のムシゴムを交換している学生メンバー。

車椅子を有効にかつ大事に使っている子ども達３人

１３歳男子

３歳のころの病状が出なかった時の写真と一緒に祖父、祖母と両親。
この子の使っている車椅子は偶然当会の会員西野氏の会社「ドリームファクトリー」製の車椅子で、これまで故障はしていない、との話。

１４歳男子

車椅子は室内で使っており、外では自転車に乗っている。我々の前で運転をしてくれたが、失っている右足の代わりに、改造したペダルを手でこいで自由に自転車を操っている姿は感動的ですらあった。

アメリカ製タイヤなのでムシゴムの確認は出来なかったが、故障したら自転車屋があるから、と母親が明るい表情で話していた。

１４歳男子

家族が経営している店の前で母親とソムペット会長と一緒に写真に納まっている彼の車椅子は、父親と１００歳の祖父も時折使用している家族にとっては貴重な存在。文字通り一家を支えている、と言える。修理は自分たちで行い、空気入れも持っている、とのことで予備のムシゴムを渡しながら車椅子に思わず「がんばれよ！と一声。

以上